

からふと
樺太の思い出を少し。

大野節子

私が六歳か七歳の頃の秋、川で遊んでいた時鮭が登ってきました。一人で鮭を叩き、捕まえ、引きずりながら家に戻りました。母はそれを捨てずに、焼き藁で紐を編み、鮭を軒先に干しました。それを見て私はうれしかった。だって私が取った魚がちゃんと食べ物になるんです。

海ではシシャモが岸に黒くなって、あがって来ました。バケツに掬い取り、持って帰ると今度は母が串に刺して干します。これも焼いて食べると、とてもおいしい。

秋はとても楽しい事がたくさんありました。山に行くとブルーベリーがとり放題。(樺太ではフレップと呼んでいました。)二人の兄はいつも私と一緒に連れて行ってくれました。ある日の事、いつものようにブルーベリーを取っていました。すると兄が急に「節子、逃げろ」と大声で叫ぶのです。私は兄達の前を走りました。木の上に熊がいると言うのです。三人は後ろも見ずに駆け出しました。大きな道まで出てホッと一息をつきました。兄は「良かった、良かった」と言いました。そんな怖いこともありました。

熊と一緒に取ったブルーベリーはその日のお八つにもなりました。余った分は母さんがビンに入れ、冬までしまっておきます。口は甘酸っぱい美味しさで一杯になりましたが、口の中も、口の回りも、そして手も赤紫に染まっていました。

お正月には樽柿がお八つになりました。凍っているので水の入ったバケツで柿をとかし、食べます。柿の先が大きく尖っていたのを覚えています。

小学生になった冬にスキー遠足がありました。兄二人も行くので私も行く事にしました。冬になると小学生でも学校にはスキーで行きます。小学生でもス

じょうず
キーは上手なので、私以外にもたくさん小学生が喜んで参加しました。

いんそつ
先生も引率します。みんな一列に並んで出発。一・二時間は歩きました。昼にはみんなでお握りを食べました。帰りは今来た道ではなく、坂道でした。急な坂で私は怖くて立ちすくんでしまいました。すると二人の兄達が来て、体の両方を支えて一緒に下ろしてくれました。すこし遅れて学校に着きました。みんなはもう一列に並んで待っていました。男の先生が兄達の前に来て、「何をやってたのだ」といい、いきなり兄二人の顔にビンタを張りました。私は驚き、目には涙が溢れました。二人は何も言いませんでした。家に帰ってから、母にも私にも何も言いませんでした。それから兄達はいつも私と一緒に、遊びに連れて行ってくれました。

その頃私は日本舞踊を習っていました。踊りも、教えてくれていたお師匠さんも好きでした。ある日のこと、母さんが赤い鼻緒の下駄を買ってくれました。

きれいはなもようはけいこか
綺麗で可愛い花模様も付いていました。それを履いて踊りの稽古に駆け出しました。あんまり急いでいたので、前のめりに転んでしまいました。怪我した痛さも気にせず、又走り出しました。赤い鼻緒の下駄で心は一杯なのです。そして

あいさつ
「先生、こんにちは」と元気良く挨拶しました。すると踊りの先生は「えっちゃん、足はどうしたの、血が出ている」とモンペの下を指しました。(私はその頃節子という名前が嫌いで自分のことを「えっちゃん」と言っていました。お師匠さんも「えっちゃん」と呼んでくれていました。) 急いで右足を見ると木

さきずぐち
の根が刺さり、大きな傷口から血が流れていました。お師匠さんはお父さんを呼んで来て、父さんはすぐ近くのお医者さんに私を連れてきました。二・三針縫

てんば
う傷でした。「この子は何せお転婆だから」と言いながらも、私をオンブして家

きずあと
に帰りました。今でもその傷跡は残っています。

二三日して父は小さなマリを買ってきてくれました。それで遊んでいたの

すが、下の兄はそれを取り上げ、野球のボールにしました。^{あげく}拳句の果てにマリをパンクさせてしまいました。私は大声で泣くし、下の兄は父さんに怒られていました。上の兄はそんなことをしないのです。下の兄は良く遊んでくれるのですが、私を構うのが好きなのか、よくいたずらをして私を泣かせたり、怒らせたりしました。

^{ひな}雛祭りの思い出もあります。三月三日にはお父さんが雛人形を飾ってくれました。でも下の兄はいつも人形の手を^も腕いだり、^{せんす}扇子を取ったりして私をいじめました。私は泣きながら「返して」と追っかけても、それが面白いのか^や止めないのです。兄は又も父さんに^{おこ}怒られていました。あの雛人形は樺太においできました。

ある日のこと、家の前に兵隊さんがたくさん乗ったトラックが止まりました。その兵隊さんの一人が兄を手招きし、^{にわとり}鶏がほしいと言いました。兄は兵隊さんに家で飼っていた^か鶏を一羽、もって行きました。すると兵隊さんたちが鶏の首を絞め、羽をむしり出しました。私はいつも卵を産んでくれる^う鶏が殺されるのを見て泣き出しました。兄に「どうして鶏をやったの」と訊ねると兵隊さんの言うことは聞かなければならないと教えてくれました。あの鶏は兵隊さん達の焼き鳥か、鳥なべになったと思います。私はしばらくは鶏の肉も食べられませんでした。

冬になると父さんは山に行きます。^{てっぽう}鉄砲を^{かた}肩に掛け、^{にぎ}お握りをリックサックにいれ、一人で出かけます。夕方帰るとリックサックの中からは^{やまどり}山鳥やリスが出てきました。みんなビックリ。それをきれいにしてからカレーライスを作ってくれました。^{とりにく}節子は鶏肉しか食べないから、^と節子のために捕ってきた、と大きくなった頃聞いた記憶があります。

父は何でもできる人でした。小さい頃はおセンベイを焼いてくれました。お酒を飲まない人でしたので、^{しるこ}お汁粉や^{まんじゅう}おはぎやお饅頭を作ってくれました。

^{とうにようびょう}(私が糖尿病になったのも、父の作った甘いものが好きだったせいだと思い

ます。)

正月には床屋もします。近所の人たちにもしました。私も一年に二回（お正月とお盆）髪をきれいに切ってくれました。でも「節子、顔を剃るぞ」と聞く^そいやと嫌でした。顔を剃るのはいいのですが、耳の下が汚れていると、頬をバアン^{ほお}と叩くのです。それと手にタバコの臭い^{にお}が付いているのが嫌でした。

父さんは家も建て^たました。丸木を切って船も作りました。朝早く出かけ、昼ごはんは十二時、夕食は六時、毎日お風呂にはいりました。

お坊さんもしました。村の誰かが死ぬと夕方には枕^{まくらきょう}経を上げに行きます。冬には小学校の校舎やトイレ、窓の修理もしました。近所の子の修理も仕事にしていました。体がそれ程丈夫ではないのに家族のために一生懸命働いてくれました。大好きでした。